

つも中小企業または請負業者の労働でした。しかし、ソ連で鍛えた寒さに打ちかつ精神力、忍耐力、また食料不足を身をもって知り、食物のありがたさを特に痛感いたし、また何事にも創意工夫をこらす生活には自信を持ちました。

抑留記

富山県 谷村 文平

出生から入隊

大正九（一九二〇）年、富山県西礪波郡西太美村で生誕。父は当時村長、比較的豊かな農家の五番目として出生。全国的な流感のまん延で重い肺炎を病み死線をさまよう。死ぬかもと父に抱かれた写真が残っている。

小学校時代は最低の虚弱児童、中等学校でも結核で助からぬ第一号と見られていた。小学校時代、生家没落、分家の叔父の養子となる。農学校から国立盛岡高

等農林学校（農芸化学科）に進む。この頃から体力も人並みに到達。日本は満州事変から支那事変へと移行する。昭和十五（一九四〇）年卒業、当時学生が一番あこがれる国策企業、南満州鉄道株式会社に採用された。日露戦争でロシアから獲得した鉄道、鉱山、港湾を経営する会社で、当時はまさに花形企業であった。

配属されたのは牡丹江鉄道局。直接ソ連の軍港ウラジオストク、陸軍のウオロシロフと相對峙する要衝であることがひしひしと感じとれる。ここで近隣に住むロシア人の家でロシア語の個人レッスンを受けたのは、置かれた地理的環境から至極当然であった。

適齢期にあつたので昭和十五年、牡丹江で徴兵検査、甲種合格。本土での入営を希望、昭和十六年一月帰国、二月入営。敦賀歩兵第一九連隊通信中隊である。師団は第九師団（金沢）であるが、当時既に中国東北部牡丹江市に駐屯、歩兵第一九連隊は更に牡丹江市と国境線の間地点の穆稜^{ムロン}にいた。凶らずも入営前の勤務地に舞い戻る形になった。入営は二月、七尾港から盛大な見送りで羅津に上陸、鐵路牡丹江に送られ

たが、この北朝鮮の国境は後に捕虜となって通過する運命が待っていたのである。歩兵第一九連隊の駐屯する穆稜へは鉄道で送られる。第九師団隷下の歩兵二個連隊、砲、工、輜、通の諸隊は牡丹江に駐屯していた。穆稜には戦車、野重等の部隊があつてソ連の侵攻に対応できる態勢になっていると思われた。

昭和十六年四月からこの穆稜で初年兵教育を受ける。所属は通信中隊、初期訓練から無線通信手不適のらく印が押され、有線通信の教育を受ける。昭和十六年六月の独ソ開戦に呼応して発令されたものか、七月の関特演の決定によって発動したものか、はっきりしないが、深夜「非常呼集」が発令された。ソ連との国境の穆稜である。二年前のノモンハン事件に参戦した同級生からじかに「ソ連機動部隊との戦闘の恐怖」を聞かされていたので、いよいよその時が迫ったと思つた。「東の空」は相変わらず平穩であるが不気味、続いて全関東軍に「関特演」が下令される。本土から召集兵が続々と到着、連隊は平時の倍にふくらむ。満州の東部国境地帯は兵員、馬匹、天幕で埋め尽くされた

かの様相に一変する。態勢は整つたがそのまま膠着こうちやく。戦線は太平洋に移動。(対米英戦)

昭和十六年末、私は第九師団の企画するロシア語教育隊に派遣される。当時の師団長が特務機関(対ソ謀略機関)からの転任であつたことが企画の由来といわれた。師団隷下各隊は中隊に一人の割合で通訳要員を育成するとされていた。私は入隊前に少々ロシア語を経験していたことで選ばれたらしい。期間は当初六月と聞いていたが約十カ月まで延長、秋の大演習開始で打ち切りとなつた。教官はハルビン学院卒の将校、関東軍のロシア語教育隊終了の下士官、白系露人で日本語のよくできる中年のエリツインと、脱走してきたと自称する元ソ連兵のイワチョフであつた。教育は主に軍用ロシア語会話集がテキストで、「止まれ」「誰か?」「手をあげろ!」というような言葉で始まつた。このロシア語が後に捕虜としてソ連領で役立つことは夢想だになつた。

当時の第九師団の配備は、歩三五連隊がソ連沿海地方のウオロシロフに相待峙する国境の老黒山、師団司

令部が牡丹江、所属連隊がその中間に当たる穆稜にあり、捕虜時代に連行されるセミヨノフカ、ウオロシロフは正に攻撃目標としていた地域である。

ソ連軍侵攻前

昭和十七、十八年、太平洋の形勢悪化、ソ連軍の対独反攻奏攻、昭和十九年所属する第九師団は沖繩へ、対ソ要員としてマークされている私は残留。当時経理部予備下士候の教育を受けていたので、十九年八月、主計伍長、連隊本部付。隣接する第一八師団も転用になったので両師団の残留者で第一二〇師団を編成、私は隷下の歩第二六一連隊本部付。師団司令部は南朝鮮の大邱に、所属連隊は玄界灘に面する海岸線の三千浦で対米防衛陣地構築の配備に就く（二十年四月）。八月、主計軍曹。

二十年八月、ソ連軍の侵攻開始を受けて第一二〇師団は北方へ転進、所属連隊は対米防衛の海岸線を放棄。出発したのが八月十五日早朝。連隊の諸経費支払いのため単独後発を命ぜられた私は、支払い先の朝鮮人の家で敗戦の報を聞く。当日は釜山の駅、埠頭で満

州から避難民の列車が次々到着する状況を見る。北上する列車はほとんどない。夕方便乗の貨車を見つけて大邱へ、ここで師団司令部の位置を確認京城（ソウル）へ。京城で所属連隊の位置を確認、平壤へ列車を拾いながらの旅である。

小さな広場でも解放を喜ぶ朝鮮民衆の踊りの輪、敗戦の状況を質問しても、あまりあからさまに答えてくれない。言葉をにごす朝鮮の大人達。北と南が分断されるなど全く思いもつかず、本隊追求を考えて平壤に到着したのが八月二十日頃。師団指令部と他の連隊は南朝鮮側、私の所属連隊だけが平壤でソ連に投降することになっていたのである。

ソ連軍侵攻（終戦）

平壤では現地日本軍の空兵舎に収容された。対ソ戦の配備に出動した現地軍の兵舎である。ソ連はまだ姿を見せないが降伏の準備中であつた。軍旗の焼却、兵器の取りまとめが進んでいた。私には到着と同時に連隊が所有する全部の現金を全隊員に給与割の形で配分する作業が課せられた。八月二十五日の収容所入りま

で不眠不休で仕上げたので、外部のことは全く目にも耳にも入っていない。

終戦

八月十五日は所属連隊がソ防衛の配置に移動出発の日であり、私は単独後発を命ぜられたので途中で現地人から終戦の事を知ったに過ぎず、所属連隊に追及することだけが頭にあった。それは、相当額の前渡金を保有するのでその精算を主要な任務と考えたことによる。八月二十日平壤において本隊に合流できたので順調に目的を達成したことになるが、後から振り返ると、三十八度線の北へ到達したことが以後五年に及ぶ抑留の運命を担う第一歩であった。

北朝鮮の抑留

平壤の陸軍兵舎居住のまま武装解除。八月二十五日頃、郊外三合里の軍演習場と思われるバラックに移動。周囲には鉄条網、監視塔などの工作が加えられ、だんだん収容所らしく変ぼうする。

三合里収容所は通化へ移動した関東軍司令部関連の諸部隊が主で、戦闘を経験していない諸方面からの部

隊であるから被服、装備とも良好であった。食料も米が支給されて問題はなかったが、広場の中央に牛の頭、脚部が積み上げられたのには驚いた。脳味噌料理、骨髄のバター状脂肪を料理するのが捕虜生活の最初の仕事になった。港湾などの荷役作業に出動したのは一部の大隊で、順次大隊単位で移送されたが、目的地は日本海側の興南であることまで大体わかってきた。

ロシア語通訳

第九師団の主催する通訳要員教育（昭和十六、十七年）を受けていたので、収容所入りと同時に役立つことになった。昭和十九年、南鮮の三千浦に移駐の際、もはやその必要がなくなったものと判断、辞書など一切を処分した後、ソ連参戦の大転換が突発、有用武器を全く持たぬ丸裸のロシア語通訳が始まったのである。

昭和二十年末「東京ダモイ」のかけ声で千人単位の大隊編成で貨車に乗った私の大隊は、資料によると大隊長水谷大尉で、興南に移送された。興南収容所では

港湾の荷役、化学コンビナート関係の作業をしていた大隊がソ連に送られ、その穴埋めが三合里から送られるという筋書きになっていた。

車両整備基地（ソ軍）への派遣

到着と同時に自動車整備の技術者、旋盤工、仕上工等が調べられ約二十人の職人集団が編成され、私があるの通訳、隊長の将校がついて車輪工場に隣接する街中の一軒家が宿舎として与えられる。興南に隣接する咸興市内である。作業はエンジンを下ろして分解、摩耗した部品を交換、すり合わせて組み上げる、オーバールールと呼ばれる作業で、使い捨ての現在では忘れられている仕事である。ロシア、アメリカ、日本の車種が対象で、その優劣、欠陥がよく分かって面白かった。

最初は仕事の説明に手間取ったが、職人同志の理解は容易で、軌道に乗ると私は糧秣受領か入浴の世話（外部施設を利用）ぐらいでよくなった。春が過ぎる頃から「凍傷の日本人が朝鮮へ送還されている」といううわさを耳にするようになる。同時に「お前達、働きが悪いとシベリア送りになるぞ……」という言葉が耳に

するようになった。受領する糧秣の定量はシベリアの場合と変わらないと思うが、朝鮮では穀物、パンが全部米に換算されるから、重労働でない職人には余裕ができる。私はそれを町の魚屋で鮮魚と交換して我々の食事を豊かにすることができた。糧秣は必ず自分が受領に立ち会うから彼等にごまかされたりしない。この車両工場は約八カ月で終わり、昭和二十一年八月下旬、咸興收容所に戻った。

シベリア抑留地への旅

昭和二十一年九月、見元大尉を長とする労働大隊が編成され、陸路、鉄道輸送でソ連領に向けて出発。戦場から徒歩で入ソされた部隊にくらべ、翌年秋鉄道輸送でのソ連行きは大変恵まれた旅ではあったが、途中での相次ぐ脱走では遂に銃殺による処刑にまで至ったのである。鉄道は咸興から内陸部を北上、満州との国境に達して図們江沿いに東進、図們江の河口部（日本海側）の国境を舟橋でソ連側へ移るのが日本支配時代の鉄路を利用するソ連との連絡路であった（現在は図們江の河口部に鉄橋が完成、海沿いの鉄路で清津、羅

津經由の国際線が距離を縮めている。咸興出発からソ連領入りまで約二カ月を要している。敗戦直後の「東京タモイ」のような「だまし」は通用しないので、途中の排便、給水、炊事などの停車中に逃亡者が必ず出る。当時は朝鮮側の自警団などに摘発され、次の梯団に収容されるようなケースが多かった。輸送指揮官の命令で逃亡者が出た車両について炎天下に扉の開放を許さないというような処分を命じたので、嘆願の未開放されたときには「ゆでだこ」のような状態で車両から運び出された例もあった。

阿吾地での逃亡と銃殺

満州と朝鮮の国境となった日本海に注ぐ図們江沿いで、日本海の河口に近い所、張鼓峰事件の現場に相接しているのが「阿吾地」と称する小集落の位置である。九月末頃、この駅に入った列車が一向に動く気配がない。「どうなったのか？」と説明を求めても具体的な説明がない。一番困るのは付近で捨てていた炊事の燃料が得られない。嘆願の結果、村の裏側にある小山へ人を出す案が認められる。各車両から数人ずつの

五十人ほどに警戒兵が付添い、私は薪取り隊の責任者。逃亡者が出たら大変、森では分散しての作業だから全員の動きが見えるわけではない。好機到来！集合時刻が来て点呼すると足りない！私は通訳としての付添いだがソ連兵の追及を一身に受けねばならない。それまでなごやかに談笑していた若い兵士は握る銃に力をこめ殺気立ってくる。薪を背負って集合した者の中には、戦友の成功を祈る者、身勝手な奴のために迷惑するとぼやく者、様々。貨車に帰ると逃亡者が出た車両は報復的に締切りや薪取り停止などが課されたが、長期の停滞であるから人道上の配慮を求める我々の要求は無視できない。逃亡者本人の責任を追及しても無駄なことから「所属の班長を銃殺する」とまでの敵命の上で薪取りは再開されたが、やっぱり逃亡が出た。輸送指揮官のロシア人大尉（年配者）の二人柄か、そのままになった。「ほっとした」矢先に事件が起きた。

早朝起床前から何かあわただしい。「逃亡だ！」「すぐ点呼」と喚んでいる。全員貨車の外に整列、点呼。

三人が足りない。事の次第はこうである。阿吾地の駅は村落の外側にあり、更にその外側に三、四本の線路が並ぶ。捕虜列車は駅舎より遠い外側の線路に停車、前方は原野で国境の凶們江に続くから監視は楽、この盲点を突いた。炊事するあたりに水路の入口があつて駅の表に通じている。点呼後の薄暗がりを利用して、彼らはここから暗渠に潜入、村落側へ抜けたが、朝鮮側の自警団員に発見されてしまった。ただちにソ連側に引き渡され、日本側幹部一同の助命嘆願も拒否される。目隠しされた三人が整列した一同に向かつて並ぶ。リーダーはやや年長の人物で、がっしりした体格であるが他の二人は若い兵である。常に死と向き合ってきたので、このような事態に対する覚悟ができていたのか、全くとり乱すことがない。「撃て！」自動小銃が発射されて三人は倒れた。伝え聞くところでは、リーダーは少し年輩で中国在任の経験があるところから、中国領に入ったら何とかなると若い二人を誘ったという。私はこの大隊本部で通訳をしていたので、事件直前の通告に「今度こそはやるかも……」というソ

連側の気持ちを感じていながら、命令受領者を通じて伝達される各隊の受けとり方に反映されていなかった実情が尊い犠牲者を出さなくなったと思われてならなかった。

阿吾地の停滞は丸一カ月になった。これは「カランチン」とロシア語で呼ばれ「検疫」の期間で、国際的に認められている措置である。終戦直後は考慮なしに本国へ連行したが、発生した発疹チフス等の問題から正規の防疫措置がとられたものと推察する。但し、そのことを初めから明示せず阿吾地に停滞したのは、明示することで起きるトラブルを予防したものとか考えられない。

国境通過

銃殺事件の後すぐに国境を通過したように思われる。私は常に食糧等の物資を積載したトラックの上に乗せられていたので国境も歩いていない。本隊は夜間徒歩でこの地点を通過している。ここは昭和十二年の張鼓峰事件の現地であることはよく知っていたので、トラックの上から道路沿いの草原に墓標らしい物体が

前照燈に浮かんで次々に見えてくるのに注目していた。

クラスキノ

海軍の基地ポシェットに近いソ連側鉄道の終点がこのクラスキノであった。多数の日本人捕虜がこの基地を通過して入ソしたが、我々の大隊はその最後に相当するはずである。この地で食糧一カ月分を受領、基地司令官が日本側幹部に向かつて言ったのが「ミカド（天皇）なしでも幸福に生活する国をよく見てほしい……」だったので、これはきつとヨーロッパ・ロシアまでも連行する計画と覚悟したのであるが、翌朝になつてみると辺びな駅舎も見当たらず粗末な野原の引込線で降ろされていた。クラスキノから程遠くない沿海地方セミヨノフカ地区スイソエフカであった。その後公表された当時の抑留者送還交渉の進み方と照らし合わせてみると、我々の入ソ同時に交渉が行なわれており、最初の送還船は直後の十二月舞鶴入港であることから、遠くウラルを越させてヨーロッパ・ロシア復興に利用するスターリンの目算が急ぎよ変更になった

ものと私は憶測している。

抑留地の生活

セミヨノフカは、ソ満国境の興凱湖（ウシカ）と日本海の間、ウスリー江の源流であるダウビへ川沿いの集落で、沿海地方の「ヘそ」に相当する位置を占める。連行されたのは鉄道駅のスイソエフカから東方約十キロほどの原生林中で、途中にある收容所を通過、更に溪流沿いに奥へ進む。全くの原生林内で何の構造物もない場所に着いた。その夜は着衣のまま野宿、朝になつて外被の上に白い雪があつて北国へ来たのを実感。もう十一月に近い。朝鮮でもらつた被服は良質であり、現役五年目の私には苦になる程ではなかった。ただ、何もないこの山中でどうなるのかの予想もできない不安があつた。

收容所の建設

周りは松（チョウセンゴヨウ）と唐檜を主とする原生林中で、太陽の見えるのはごく僅か。風も樹海の上を通るだけである。中隊宿舎は半地下式で丸太を横に積みあげて壁面とするシベリア方式、天井は丸太が並べ

られてその上に土を置いて防寒する。外壁は厚く泥壁をつけて防寒第一、窓は明かりとりで最小限に、板ガラスの完全なものはなく、破片の大きいものを何枚も合わせて壁土で塗り固める。暖房にドラム缶製薪ストーブを置いたが煙突材料がない。缶詰のからを集めてブリキ板を切り取り、職人のブリキ屋が何百枚も叩いて組み合わせて本式の煙突に合成、日本人の根気と器用さの標本となる作品が中隊宿舎の中心に立ち上がり、ロシア極東シホテアリニ山脈のふところで捕虜兵士にぬくもりを与えた。初めはランプもない夜の舍内、松脂の裸火が唯一の光源だから、立ち昇る油煙で体も衣服も真っ黒。春になって蒸気機関による小型発電機が始動するまで続いた。糧秣は一応定量が渡されても内容による優劣の差がひどい。小麦粉にふすま、もみながら混入したり、廃棄分量が過大で実質がないジャガイモだったり、当時の現地の食糧事情がそのまま反映した。恒常的飢餓感からの悪食、慢性的下痢症状から始まる栄養失調が多発した。鳥目が多発したのも同様の原因による栄養障害と思われた。シラミは短

期間に全宿舎に充満。前年の冬、発疹チフスで大きな被害があったことからとられたのであろう、二回ほど乾熱滅菌の施設へ運ばれ処置を受けたが、徹底したものではなかった。春にはパン焼窯、日本式風呂もでき、食糧事情も良くなり、收容所全体に活気を感じ始めた。

労 役

日本人捕虜連行の目的が労役にあることは、敗戦後一年の收容所生活で誰もがよくわかっていた。当初は住居建設の自活作業と一般的な労役の伐採作業が同時進行の形で進み、後には作業班と内部勤務者とに分かれる。

主な労役は木材の伐採、搬出、トラックへの積載である。付随するのが車両を導入する道路の開削で、三個中隊が伐採、搬出、一個中隊が道路整備と木材の積載であった。伐採班は樹木を倒して横枝を落とし、一定の長さに切断、道路まで転がして積載できるように土場積み、残る枝葉は焼却して作業完了する。道路隊は樹木を伐採して表土を剥ぎ車両の進入できる状態に

まですればよいので、本格的道路の建設とは違い伐木の根株処理が重要作業であった。ノルマは距離によるが、自然条件の差が大きいので、現場で適宜決められたように思われる。積載班も道路中隊から編成され、道路脇の土場積み丸太をトラックに積載した。

十メートルもある巨木の密生する原生林の伐採作業は熟練した職人の仕事である。素人集団が精神的にも最低の状態で着手しているから、習熟するまで事故が多発した。その上この土地特有の「ダニ脳炎」の発生が数人の命を奪った。これは七、八月頃に発生、露出する人間の肌に松の枝についているダニが付着して食い込む。あまり痛みを感じないので、気づいたときは払っても落ちない状態になる。これが脳炎ウイルスを媒介するので発熱、昏睡状態から死に至る。この当時は有効な薬がないので注意する以外対策はなかった。現地の医務室で死亡した一人については日ノ軍医が立会いで大脳を開いて死因を確認、私も立ち会ったので強く印象に残っている。現在墓参の場合でもダニについてきびしく注意しているが、当時は全く知らせず

作業させたロシア側の責任が問われねばならない。

森の恵み

原生林（タイガ）の苦しい労役には余禄があつて、我々の慰めとなり栄養補給となった。

アレーヒ（松の実）、沿海地方の松は「チョウセンゴヨウ」と呼ぶ樹種で松かさが大きく、固い殻を割ると小さいが充実した胡桃状の実があつてうまい。量が多いので貴重な栄養の補給源。ユクアはうす緑のぶどう状の果実で蔓性植物、北海道では自生するという。多汁で甘い、最高の甘味。山ブドウは日本のものに近い。たくさんとれるとつぶして、支給（個人配分）の砂糖を出し合つて本職の酒屋さんに委託してぶどう酒に加工してもらつた。捕虜の身分を超越できるひとときがあつた。山菜の種類は僅少、ノビルが一番のお目当て。この他よく利用したのが樹液のジュースであつた。これは春の萌芽の頃、白樺、カエデなどの樹皮に傷を付けて、したたり落ちる樹液を水筒に受けるのである。仕事前にセットしておくとき引き揚げる頃には冷たく甘い樹液がいっぱいになっている。白樺は量が多

いが甘さではカエデの方が上であった。沿海地方で最高級の森の恵みは「野生の朝鮮人参」。値打ちは金に相当と言われた。私の大隊では一株発見している。内密にしていたがロシア側に漏れ、探索されそうになったが守り通した。小片をいただいたが、味は仁丹のような感じを記憶している。

密告者

昭和二十二年初め、ラーゲリの住居、炊事場もでき上がり、生活も軌道に乗った頃、軍人ではない制服の人物がラーゲリに現れる。帽子の色が青いので通称「青帽」、別称「ゲ・ペ・ウ」。この人物の出現と密告者の組織化は時期が一致している。日中の労苦から解放され深い眠りに落ちた頃、不寝番に呼び起こされる。行ってみると日頃収容所で見かけない人物がいる。日本語のよくできる朝鮮系のような感じの人物の前に座る。「ソ連邦をどう思いますか？」と。山奥のラーゲリでようやく数カ月、ソ連の実情など皆目わかっていない。日本式の儀礼では相手のことをもちあげるのが通例である。まして、夜中の呼び出しで議論

するのも気が重い。悪しからずの程度で逃げるつもりが尻にかかってしまった。「それではソ連に協力してほしい」。任務は、収容所での「反ソ」言動に注意して知らせてほしいというのである。初めの柔和な顔つきが一変して陰悪な「特高」の顔になっている。署名させられる。

こうなったら、残るは「彼らにあやつられぬぞ！」が唯一の抵抗である。この密約を担当した人物はこの夜に会ったきりで、実質的にラーゲリ内の密告者を取り仕切るのは「青帽」である。一カ月おきぐらいに「夜の呼び出し」がある。「何か情報は？」とくる。「何もない」と答える。青帽氏は他の日本人密告者には多分あまりうまくない日本語で対応しているはずであるが、私に対してはロシア語のままだから言葉のごみがじかに伝わる。「お前は日本の憲兵が捕虜をどうしたか知っているだろうか?」「この原生林の中でお前を消すのは何でもないのだ」と言うのが一番身にした。

一方で私自身が青帽氏の要注意人物となっていた。

それは別の密告者が私の身上調査を命ぜられていたが、全く手がかりがなく直接話を聞きに来たことでわかった。私は通訳者の仕事で所属部隊から分かれ転々としてたから素性が知られていなかった。青帽氏は、軍隊でロシア語を習得し対ソ連情報の仕事をしていたのでないかと睨んだらしい。直接来訪下さった密告者の方には在満中に民間で習得した旨説明しておいた。この頃、同一収容所で通訳をされていた方が二人他に転出され、関東軍の情報部とか特務機関に関係されていたとのうわさが流れた。

私に事情を明かして下さった密告者の方と私自身の共通項を考えてみると、学歴である。大隊本部で数回隊員名簿をロシア文字で作成させられているので気付くのである。ソ連が学校修業年数を必ず記入させるのは、このような用途に利用する魂胆があったと思われる。

私が青帽氏の支配下にいたのは約一カ年で全抑留期間の四分の一に過ぎないが、「ソ連の闇部に取り込まれた」悔しさが帰国後も長く脳裏を去らなかつた。

通訳としての私の日課

スイソエフカ駅東方十キロメートルの第三独立労働大隊（見元等隊長）の収容所における私の位置は大隊本部付通訳者。本部には玉本さんという老練な通訳がおられて大隊長の業務に関与されるから、私は午前は主に医務室において日ソ両医師の補佐、午後は伐採の現場に出て集積されている木材の「検収」で、検収員はロシアの民間人であった。専用の物差しを当てて立方メートル（ m^3 ）を私が読んで検収員が記録する。初めは居住地に隣接する現場であるが、半年もたつと数キロ先に分散する現場を完全に検収するのは強行軍であった。作業量についてのトラブルはなかったが、木材の集積状態、枝葉の焼却処理の不十分、伐採禁止の樹種が倒れていた等が問題であった。

私にとって問題は、医療に関する事項に多くの難題があった。戦場からラーゲリに直行した諸部隊では最初の冬に多くの犠牲者を出したのと同様に、二年目入ソの私達の場合もロシアの風土と糧食には抵抗しきれなかつた。全死亡者の半数以上がこの冬に倒れた。初

年度（朝鮮）は温暖で食糧にも恵まれ、ほとんど犠牲のなかった集団であるが、粗悪な食糧にどう対応するか的心構えができていない、寒冷地の生活習慣がない、シラミ、南京虫の攻撃に耐えられない、前途の光明が見えない等々が絶望感を醸成して犠牲者を出したと私は思っている。

下痢症状から栄養失調、衰弱死のケースが目立った。医薬品は日本側の軍医の手持ち以外に補給はないので、軍医自身、将来の見込みがないのに投薬できないのが実情。冬の終わり頃、ソ連側が軍医の鞆の検査を強行した。この時温存されている薬剤が見つかり患者に投与、助かった兵もあったが、一時的な効用に過ぎなかった。昭和二十二年の三月頃、私は衰弱した患者を後送入院させたつもりでいた。帰国後御本人と会う機会があつて聞いてみると「病院らしい施設はなくて、直接ナホトカへ送られた」とのこと。労働大隊の場合、患者を収容治療する対策が全くなかったのではないか？

私の大隊の死没者の多くは栄養失調から衰弱死に至

るケースであつたように思われた。これは春の到来ともにおさまる。山菜の時期には毒草によると思われたのが一件、夏には脳炎ダニの犠牲が出た。初年度の厳冬期にあつた惨状は繰り返していかない。ロシアの食糧事情がもろに収容所の炊事に反映したと思われた。穀物、野菜を定量通り受領しても、内容（品質、種類）には天地の差があつた。

最も困難であつた厳冬期、病弱者に対する体力の判定は、よく報告されている通り、皮膚をつまみ、皮下脂肪の状態で決めていた。

医学専門学校を終わつただけで実務経験のない女医が軍医として収容所に配属されていた。美人でやさしいが経験のない彼女らには、皮膚をつまんで判定するぐらいの能力しかなかったのかもしれない。長期の大戦争下での医学教育であるから理解できぬことではない。

チェリヤンザ派遣

昭和二十二年末から二十三年四月頃まで一個中隊が他の伐採区に派遣されることになり、私が同行する命

を受けた。この地区は鉄道関係の用材を切り出している
るので、陸軍の管理下にいる労働大隊とは別系統にあ
り、いわば民間事業所への応援であった。

作業内容は変わらないが、粗雑な軍の仕事に対して
丁寧な職人の作業場の感じである。生活も野営の延長
ではなく、人間の住居に移ったやわらかみがあった。

二百名余の小集団であるから炊事も丁寧で、家庭的な
印象を持った。前年の冬に味わった地獄に比べるとま
さに極楽であったが、具体的な事柄が一向に思い出せ
ない。

現在日本で見ることのできる資料によると、チェリ
ヤンザの日本人は一九四七年の秋までに帰国したの
で、次の冬（一般に樹木の伐採は冬の作業となってい
る）その穴埋めに我々が派遣されたようである。

二十三年春チェリヤンザから本隊に戻ると民主運動
が活発になっていて、私達の中隊は旧時代人のように
迎えられた。

ウオロシロフ派遣

二十三年夏頃、チェリヤンザ帰還の中隊は、沿海地

方軍管区司令部の所在地であり伐採した木材の輸送先
である軍都ウオロシロフに派遣される。この場合も日
本へ送還された部隊の穴埋めであった。本隊で伐採す
る木材はトラックでスイソエフカ駅へ運ばれ、ここで
貨車積みしてウオロシロフ駅の引込線に送られる。線
路の周りに丸屋根の包（バオ）型の組立小屋があっ
て、作業員の日本人ラーゲリとなっていた。私は中隊
から大工、左官等の職人チームを編成させられ軍官舎
の営繕作業に就いた。

中隊主力とは宿舎も別になったので本隊の帰国した
のも気づかず二十四年の年末を迎え、冬期は軍官舎
（集合住宅）の集中暖房のかま焚きとして配置に就い
ていた二十五年の正月、ささやかな新年の祝いも終
わったところに帰国命令が届いたのである。ロシア人
労働者と持ち場を交代して、別れを惜しむ間もなくナ
ホトカに向かった。

後から考えると、朝鮮戦争の直前の帰国でした。入
ノの頃は戦争の時代が終わった、シベリアで働いても
らうのも「皆さんが最後」と語っていた彼等の口調

が、少し変わってきていたのが耳に残っている。

帰国

昭和二十五年二月、高砂丸で帰国。ナホトカでの所持品検査の厳しいことは現地によく聞いていたが、最終便の我々はフリー・パスの状況であった。逆に舞鶴では徹底的にやられた。

入浴中に衣類が調べられて一切の文字が没収されたのである。そのうえ現地での役職を書かせ一網打尽に「赤旗組」に隔離、帰郷日も数日遅らせ、新聞報道もしている。前年まで「民主運動家」達が大騒ぎで帰国した「とぼっちり」を、まさか自分がかぶることにならうとは？ 私は日本軍でロシア語教育を受けたので日本人のために努めてきたつもりである。それが逆の評価を受ける形に終わった。

【執筆者の紹介】

終戦から五十五年の歳月が流れました。

当時、旧満州の防衛に当たっていた関東軍は、相次ぐ南方への転出のため、「張子の虎」同然でした。

ソ連軍が不可侵条約を破って満州へ侵攻したのは、日本がポツダム宣言を受諾する数日前の八月九日の未明のことでした。日本の降伏を察知したソ連軍は、怒涛のように押し寄せて無抵抗の日本軍を捕捉し、略奪と暴行を欲しいままにしました。そのうえ、ポツダム宣言に違背して関東軍の将兵と民間人を含む七十数万人を捕虜としてソ連国内へ拉致連行し、主に酷寒の地シベリア方面に長期にわたり抑留しました。

スターリンの野望は、国内の産業復興と発展のためにバム鉄道の建設や伐採、採炭、土木建築の重労働に使役し、粗悪な食糧と寒さとノルマに追われた抑留者は、栄養失調と疫病に倒れ六万人に及ぶ人命を失った。

加えて、これらに付随する労働賃金の問題も派生し、いまだに解決されていない。

今回、財団法人全国抑留者協会の主唱によりシベリア抑留労苦調査のため体験記を収集されることは、今世紀の区切りの時でもあり、抑留問題が風化せんとしている時でもあり、誠に時宜を得たものと存じます。

富山県連合会では、本部の依頼に応え、福光支部長の谷村文平さんに当時の体験手記を執筆していただきました。

谷村さんは、昭和十六年に満州にあった郷土部隊に入隊して以来、長い間の軍隊生活の中で軍の教育でロシア語を習得され、終戦前後には所属部隊の移動と共に満州から朝鮮へ、そして北鮮へと転々とした、当時の軍の混乱や朝鮮の民情などを垣間見ることができませんでした。また、谷村さんは経理部の所属であったので、あまり見聞きしたことのない視野からの記述は珍しいと思います。

北鮮三合里の收容所からは通訳としてソ連領へ連行されたが、途中、日本兵銃殺事件などに遭遇され、日ソの間に入って勝者の横暴な命令に大変苦勞されたことでしょう。

また、谷村さんは復員後、福光中学校、福野高校の教師を務め、退職後は高岡栄養専門学校講師も務め公的な立場で活躍されたが、一面、シベリア抑留問題にも参画され度重なる訪ソ墓参の折りに、收容所で

あったセミヨノフカを訪問した際に地元紙の取材記者のヤキーモフさんと識り合い、これが縁となって家族を交えた草の根交流が始まりました。

ヤキーモフさんを自宅に招待し、少しでも日本の地方文化も知ってもらおうと城端のお祭り見物や県内各地の産業文化を案内し、折から開かれていた五箇山の「国際交流集会」に参加してもらい、十日間にわたり有意義な日程を過ごし日本文化の情緒を味わってもらった。ヤキーモフさんは新聞記者だから、きっと谷村さんの善意に感じ、日本の地方文化の良さも看取されたことでしょう。

今や、二十一世紀を迎えるにあたり、恩讐を越えて日ソの相互理解が望まれる時である。ひいてはシベリア問題解決の糸口ともなればと、谷村さんは草の根運動を実践しているのである。

(富山県 山田 秀三)